



臥龍せんせいの風



蓬 恵碩

臥龍せんせいと風

臥龍せんせいがまだその名前と呼ばれていない時のことです。

まだ小さな頃でした。

おさなごころに蝶の夢を聞きました。

夢で蝶になった人のお話でした。

毛虫の頃はうじうじと歩いていましたが、蝶になると見事な白い蝶になりましたとさ。

白い蝶は羽をぱたぱたと自由自在に操り、風を作るのです。

風はさまよい白い蝶の夢を人びとに送ります。

みなみな、それに気付くわけではありません。

それでじょじょに大きくなって人びとや世界を変えるのです。

おさなごのころに風のたよりが届くと、ああ、友達が来た、そう思ったのでした。

それが臥龍せんせいと風の初めての対話でした。

風の便り一翹

ぼくはかぜ

ちいさいかぜだよ

ぼくのささやくこえをきいておくれ

このよのかぜはつめたいというけれど

たびしてごらん ほら、ぼくと

いつでもどこでもぼくはいるよ

さがして さがして

ゆめみてごらん

ちょうになるゆめ

かぜのたよりをおくってごらん

きみのなかにもかぜがある

くちをおおきくひらいて

うたってごらん

ら ら ら ら らっ

ららららららららら

らっらっらっ

いねむり小僧からのうたごえ

ら ら らーっ

ちえっ うるさいなっておかあさんにいわれた

ぼくはうたうよりも

たくさんほんをよんで

いねむりするのがすきなんだ

こちょうのゆめをみたものさ

ぼくがちょうだったのか

ちょうはゆめだったのか

いろんなゆめをぼくはみるよ

はなのさくゆめさ

ひとのさくゆめさ

はなのちるゆめさ

ひとのちるゆめさ

はかないことおおきになみだして

いしにきざむなまえのほまれ

それよりも

かぜのたよりにおかあさんのほんしんをそっとおしえて

おかあさんはぼくをどうおもってる

いねむりこそうかなあ

かぜ かぜ かぜよ

なぜかぜか

ぼくたちはいったいなにもものなのか

ただかぜのようにみちをさまようものか

なあ かぜよ

風の便り二翹

とどいた とどいた かえってきたぞ

いねむりこぞうのたより

かぜのおときくひとはかぜにみちびかれるよ

みみをすまして

そとにでてごらん

ひろいところで

ひとさしゆびをなめてさ

かぜをはかごらん

ぼくはどこからきた？

やまから？

うみから？

かわぞいに？

ぼくはどこからきた？

おしえておくれ

あなたのいばしょ どんなばしょ

やまなみきれい？

かわはおおきい？

さかみちのとちゅう？

きょうのかぜはとどいていますか？

とりいそぎ ぴゅうぴゅう

いねむり小僧の口ずさみ

おうおう きたな

やまはきたに

かわはひがしに

かぜはびふうじゃ

ぼくのいるばしょ そりゃいえぬ

きみのいばしょはしれとるぞ

ここをふきぬけて ふきぬけて どこまでいくのか

ふきぬけながら むねのあたりになにかをのこしていく

きみのいばしょはしれとるぞ

むねのあたりがほんのりうづく

風の便り三翹

ruraru